

J・A・コメニウス「大教授學」の志向

鈴木秀勇

Bohemian (Moravian) Brotherhood 最後の監督⁽¹⁾コメニウス (Jan Amos Komensky, lat. Comenius, 1592—1670) の教育學的主著の一つとして知られる「大教授學」(Didactica Magna)⁽²⁾は、從來、多く、教育方法の書と見なされて来た。たしかに、この書の本文三十三章の内、第十五章以下の十八章は、先行する部分の二部の分量を有し、かつ、三つの群に大別されて、第一の群、すなわち、第十五章より第十九章までと、第三十二、三十三章とは、教育の目的である學識に徳と教けん⁽³⁾とが、いかにして第一に「確實に」、第二に「容易に」、第三に「徹底的に」、そして、第四に「精密、かつ、迅速に」獲得されるかについての・教育方法上の一般的原则をそれぞれ詳説し、第二の群、すなわち、第二十章より第二十五章までは、科學Ⅱ、技術Ⅱ、言語Ⅱ、道德Ⅱ、および、宗教教育について、個別的に、それぞれの教育方法を呈示し、次いで、第三の群、すなわち、第二十七章より第三十一章までは、諸種の學校をあげて、段階制教育方式を論じている。したがって、かかる構成に照すならば、あのような・通常の理解もまた、無理からぬところであり、それは、必ずしも、「大教授學」という・この書の表題にのみ由來するものとは言えない

J・A・コメニウス「大教授學」の志向

いであろう。

しかしながら、言うまでもなく、單に構成の面から見るにせよ、「大教授學」の意圖は、右のところにつきてゐるのではない。なぜなら、この書はまた、——先行する・十五の章を再び三群に分けることが許されるとするならば——第一の群、すなわち、第一章より第七章までにおいて、人間、なかんづく、若い世代の教育がなにを意味するか、を示し、第二の群、すなわち、第八章より第十章までにおいて、かかる教育にとつて、なにゆゑ學校が必要とされるか、を告げ、そして、第三の群、すなわち、第十一章より第十四章までにおいて、學校教育はいかにして組織されるべきか、を語っているからである。

ところで、このように見て來るならば、「大教授學」は、その外觀に、おいてはたしかに、教育の哲學と、その組織（學校）と、その・一般的、ならびに、個別的方法と、そして、その制度との・四つの主題を持った・かなりに整然たる體系性を呈示している、と言いうるのである。そして、この書が、從來、ならびに、同時代の・數少からぬ・いわゆる教育論にたいして「顯著な變種」をなした事情は、おそらく、ここにあらうかと考えられるのである。ところが、ひとたび目をその外觀から内部構造に移す時、「大教授學」は、それが、著者の心情と想念と思考とにおける矛盾の書であり、言いかえるならば、人間にたいする肯定と否定とが、あるいは、近代的思想と前近代の觀照とが、あるいはまた、リアルな事物は、握と神學の見解とが織りだす葛藤の典型であることを、露呈する。すなわち、この書の中には、人類の救済にたいする・悲痛な否定と、しかしまた、これへの・限らない憧憬と確信とが綾なす・不可思議な交錯があり、人間の現世的生活の意味を、ひたすら來世への準備において語る言葉と、朗々たる人間讃歌とが響

かせる不協和音がある。一方では、教育が、來世の・永遠なる生命に至る道として説かれると同時に、他方では、教育の本義は學校教育にある、とする主張が、實に分業の原理の上にすえられ、これと並んで、近代教育制度の支配的原則である段階制方式が、力をこめて提唱される。教育の可能性を確信せしめる人間觀の中には、斷定的な經驗主義と、しかしまた、神學の見解とが、共存を許されている。同じ事態は、個別的に教育方法を論ずる際、科學教育の教育方法が、明快に、Sense-realism の立場を示しておりながら、道徳¹¹、ならびに、宗教教育については、かかる立場は全く影を潜めるのはもとより、ここに語られているものは、地上否定的な規範であるにすぎない、というところにもうかがわれるであろう。のみならず、學識と徳と敬¹²、¹³とに至る一般的教育方法については、これを一つの根柢的原理から導出しようと試みる・新しい方法意識が示されているにもかかわらず、かかる意識の中で見いだされた根柢的原理とは、教育にとってついに外在的な《普遍的》自然であるにすぎない。¹⁴ところが、再びこの間を縫って、教育を、幾多の・畫期的な mechanical arts に匹敵する組織體たらしめようとする近代的思念が流れているのである。¹⁵

右のような・いくつかの矛盾、葛藤は、おそらく、その構造から言って、次のように分類されうるであろう。すなわち、一つには、人類の救済にたいする否定と肯定とのそのように、互いに對立し反撥し合う心情が、かかる緊張の中にう、積したエネルギーの噴出口を、若い世代の《教育》の中に見いだす、という矛盾であり、二つには、學校制の基礎づけや、教育方法の導出過程に示されるように、普遍的自然に信をおく・古い觀照と、人間科學の方法への・新しい意識とが、互いに絡み合い、前者が後者に包み込まれながらも、また、これに支えを與えている、という矛盾であり、三つには、經驗主義的人間像と、かかるものに無縁な神學の見解とが、互いに併存している、という矛

盾である。しかもまた、對立項間の緊張の性質とその度合とにおいてそれぞれ異なる。これらの矛盾は、互いに孤立してゐるのではなく、彼ら自身再び交錯の中にあるのが、「大教授學」の姿であると言つても、それは必ずしも過言ではないであらう。

私は、本稿で、まず、「大教授學」の志向が、果して、教育方法論たる以外のところになか、たか、どうか、を吟味したのであるが、おそらく、その過程の中で同時に、先にあげた諸矛盾が——もとより、その一二のものにすぎない——指摘されることになるであらう。

- (1) Litizow によれば、「ボヘミア史のみならずボヘミア思潮にとつても最大の重要性を有する」。この教團の創設は、「疑いもなく、Hus の死〔一四一五年〕によつて生じた・ボヘミアの宗教的大激動の・一つの所産であつた」。これの——少くとも思想的な——創始者(たとへば、Rokycan)が、Hus の・直接的精神繼承者であつた、という事柄を別にしても、教會改革を希求した・最も前進的な・この教團が、やがて、ボヘミアのロマ教會復歸に力を注いだジエズイットたちから最大の憎惡を買つたことは、自然の勢いであらう(The Count Litizow: A History of Bohemian Literature, London, 1907, pp. 201—202, 296)。コメニウスをして、その・七十八年にわたる一生の大半を、異郷の地に漂泊のうちに送らしめた迫害も、右の事情に起因するのである。彼は、一六四八年、ポーランドの Lissa で、この教團の・第二十二代目の、しかし、最後の監督の地位についた。
- (2) この著作の・最初の・そして、最も完全な (W. S. Monroe による) 英語譯は、The Great Didactic of John Amos Comenius, translated into English and edited with biographical, historical and critical introductions by M. W. Keatinge, 2 vols. [Pt. I. Introductions, Pt. II-Text]. A. & C. Black, London, 1923 [1st edition, 1896], p. 160。私は、これをテキストにした。

- (3) 私は、彼の『自然主義的』方法について述べた一節を、紙幅の関係で、本稿から削除しなければならなかつた。

(4) コメニウスが、けい眼にも、日常の經濟生活を支配するものが分業の原理であることを見、「ひとりの人間が……自らを一つの事柄に限定する場合、これは驚くべき・労働の節約である。この方法によって、ひとりの人間は多くの人間にとって有用となりうるし、多くの人間はひとりの人間にとって有用となりうる」と述べたこと(第八章)、および、彼が、多くの・畫期的な技術發明、たとえば、火藥、火砲、印刷術、飛行具、起重機、車輛、船舶、時計、樂器、水準儀、天體儀等々をあげて(第十三、第十四章)、教育をもまた一つのアートとしてこれらに擬したことは、當時のヨーロッパの産業段階にたいする彼の關心を知る上に、興味深い事柄である。彼は、Schola Indus etc. Saros-Patak. 1654. の中で、技術に、科學や、道徳や、國家や、宗教に並ぶ人間的意義を與えた。

二

「大教授學」の卷頭に付された・さして長からぬ・「讀者へのあいさつ」は、二十三箇の節を含み、およそ、五つの敘述部分から成る。すなわち、第一は、教授學についての・簡短な規定と、この書で採用される方法についての説明とを與えた部分であり(第一節―第三節)、第二に、著者が、この書で提案した教授(教育)の方法、組織、制度について、なにゆえ時代がかかる提案を必要ならしめているか、を論じた部分であり(第四節―第七節)、第三は、この書の成立當時の・教育界の情勢と、成立に至る経緯とが紹介されている部分である(第八節―第十五節)。次に、第四の部分では、この書がラテン語にほん譯された事情が(第十六節―第十八節)、そして、第五の部分では、神學者たる著者が、教育問題に關心を注ぐことの失當でない理由が(第十九節―第二十三節)、それぞれ、記されている。ところで、問題は、この「あいさつ」の中で、コメニウスが、まず「大教授學」の方法について語っているの

J・A・コメニウス「大教授學」の志向

を、いかに解すべきか、という點であろう。つまり、彼は、ここで、從來、多くの・有能な人々が、教授法の發見に努力した功績を認めつつも、なお、彼らの方法には言うべきものがあるとして、「彼らはほとんど皆、皮相な經驗から、換言すれば、後天的に (a posteriori) 拾集した・脈絡なき規範を用いて進んだ」と批評し、次いで、かかる手法に、たいして、まず、「われわれは、あえて大教授學、換言すれば、あらゆる事柄をあらゆる人間に教授する全アート (art) を與えると約束しよう。まことにそれは、成果を生ぜしめずにはおかぬように、確實にこれらを教授するアートであり、更にまた、愉快に、換言すれば、教師あるいは生徒の側に、怒りあるいは嫌惡の情を催さしめることなく、むしろ、兩者にこの上もない喜びを與えつつ、これらを教授するアートであり、更にまた、徹底的に、すなわち、皮相な・そして見せかけのものではなく、まことの知識と、正しい道德と、そして、最も深い敬けんとに到達する方法を用いて、これらを教授するアートである」とこの書の目的を語った後、續けて、「最後に、われわれは、右のすべてを先天的に (a priori)、換言すれば、事物それ自體の・不變の本性から、立證したいと思う。すなわち、あたかも湧き出る泉からするように、流れて止まぬ細流を導きだし、再びこれらをあつめて一つの川に注がしめるのである、われわれは、かくして、普遍的な學校の基礎をなす普遍的アートに土臺を與えうるのである」と、體系性を志向する方法的立場を自ら表明しているのである。ところで、かかる敘述が「あいさつ」の・最初の部分に現われていることは、當然、讀者に、この書の・本來の目的が、體系性を有する教育方法論の展開にあつたかのような印象を與えるものであろう。けれども、右の敘述から受ける印象によってこの書の志向を即斷することは、正しくない。なぜなら、それは、この「あいさつ」の執筆時期が、「大教授學」本文のそれからはなはだしく隔つていることを考慮の

外においた判断であるからである。この事柄は、先に指摘したように、「あいさつ」の中に、この書の・ラテン語へのほん譯の事情をつたえた部分(第十六節―第十八節)があることによって、立證されるのである。すなわち、彼は、ここで、次のように告げている、「それ〔大教授學〕は、最初、予の生國の人々の用に供するため、予の母國語でものされ、後日、數人の名士の忠告によって、ラテン語にほん譯された。これは、あたらならば、あまねく人々に用いられることを目途したためである」。ところで、コメニウス研究者の手によって、次のことが明らかにされている。すなわち、この書は、まず一六二七年に、つまり、一六二四年の・福音派僧職者の國外追放勅令⁽¹⁾によって、コメニウスが、無慈悲な探索者の目を、ボヘミア山中の・貴族 Sadowsky の城にのがれていた時期に、ボヘミア語で、單に「教授學」の表題で書き始められた。しかし、同年、貴族にたいし、Bohemian Brotherhood の僧職者保護禁止の勅令が發せられたため、コメニウスは、ポーランドの Lissa に亡命を餘儀なくされ(一六二八年初め)、したがって、この著述もしばらく中絶したが、やがてまた、Lissa の貴族 Raphael の保護のもとで繼續され、一六三二年、完結した。⁽²⁾一六三八年には、著者自身の手でラテン語へのほん譯が始められたが、しかし、「大教授學」の表題を付してラテン語で初めて公刊されたのは、一六五七年、彼の教授學著作全集 J. A. Comenii Opera Didactica Omnia, ab anno 1627 ad 1657 continuata, 4 Ps. Amsterdam, 1657. の第一部に含まれていたのである。だとすれば、この「あいさつ」は、平くとも右の全集版において付加されたものと見られなければならず、してみると、それは、本文執筆の・少くとも二十九年後に成ったものであろう。「あいさつ」が、本文成立當時において著者とその故國との運命の上に吹きすさんだ・三十年戦争の嵐とは縁遠い・平靜な筆致で記されているのも、それが、一つの回顧的な時

J. A. コメニウス「大教授學」の志向

期に執筆されたからである、と考えられる。しかもまた、一六五七年頃には、著者の・主たる關心が、體系性をその本質とする Pansophia の構想の上に注がれていたことを考え合わせるならば、コメニウスが「あいさつ」の中で最初に、體系性を保持した教育方法論を展開する方法について語ったことは、おそらく一六五七年當時の彼の關心事を二十九年前の舊著の中に見込んだ、ということこそあれ、成立當時における「大教授學」の意圖がこの點に存したことの立證にはほど遠い、と言わなければなるまい。

だとすれば、この書の志向を探るに至るものとして残されるのは、これに付された・いま一つの文書、すなわち、「獻狀」であろう。なぜなら、この中には、「おそらくは、現在、すなわち、かかる・血なまぐさい戦争と、かかる荒廢との後においてすら、慈悲深い父なる神は、優しくわれらに臨むであろう」という一句が見えているのであるが、もし、この現在を、三十年戦争が、その第一期、すなわち、ポヘミア・ブアルツ戦争（一六一八年—一六二三）をおえて、舞臺を低地ドイツ・デンマークに移した時期（一六二三年—一六三十年）を指すものとすれば、この「獻狀」は、「大教授學」本文の執筆と同じ時期か、あるいは、相異しても大差ない時期に成った、と言いうるからである。もとより、問題は、執筆期の・嚴密な一致よりも、「大教授學」の意圖と解されうるものを、それが藏しているかいなか、にあるのであるが、この點、「獻狀」が、「あいさつ」とはうって異なるトーンでしたためられ、すなわち、後述するように、時代の問題情況にたいする・著者の・かなり熱した心情がここに吐露されていることから推定するならば、「大教授學」の志向は、まずこの中に求めて當を失するものではない、と考えられる。先に指摘した・「あいさつ」の・第二の部分（第四節—第七節）は、「獻狀」全體に語られている消息を、後年やや冷靜に回想し

たものに相當するのである。

そこで、まず、「あいさつ」の・右の部分について、ここに語られているところを見れば、コメニウスが「大教授學」の中で抱いていた・最も根本的な思念は、「人類の救濟」の上にあつた、と言ひうる。すなわち、彼が、この書に示されている・教育上の諸提案を、自ら、「まことに重大なもの」と呼び、すべての人にむかつて、教育問題への・愼慮な思念を要請した根柢には、危機にひんしている・人類の救濟に至る手段は、教育をおいて存在しない、という意識が息づいていたのである。彼が、Raake, Lubin, Helwig, Ritter, Bodin, Glanum, Vogel, Wolfsurner, Frey, なかんづく、Johann Valentin Andrae の名をあげ、かかる人々の力によって、教養の世界と學校との中に「新時代の曙光」がさし始めた、と語る時、もとより、これは、彼自身を含めて、これらの先覺たちが、方法の缺如によつて當時の教育實踐の中に齷らされた・はなはだしい不毛状態を重大視し、かかるものへの對策を意圖したことを指すものである。けれども、少くともコメニウスの場合、更に深い・想念の層を流れていたものは、現在における・モラルの沈り、んは、あらゆる人が、力を一にしてその顛落を阻止しなければならぬ段階に立ち至つた、という危機感であり、なかんづく、教育を通じてかかる状態の改善にのみならぬ努力を拂わなければならない、という意識であつた、と考えられる。

ところで、ここに言われる・モラルの沈り、んについて、「あいさつ」がこれ以上語っておらず、これを「獻狀」が強い調子で描いていることは、先にふれたところからすれば、いわば當然であらう。

「獻狀」は、その内容から、およそ、四つの部分に分けられる。第一の部分は、かつて樂園にあつた人類の姿を描

き、樂園を失った人類のためにその再建を任務とする教會の。しかし、その任務を忘失した現狀にたいする批判を語り、第二の部分は、教會のみならず人類そのものの墮落をきびしくつき、第三の部分では、かかる人類を再び救済にむかわしめる道は、若い世代の教育以外にない、とする見解が示され、そして、第四の部分では、いかに、人類の危機が深刻であるにせよ、その救済の希望は、若い世代の中に輝いている旨が述べられているのである。

ここで特徴的な事柄は、一見してすでに明らかのように、彼が人類の運命について、すぐれて神學的な視點から論じている、ということである。このことは、右の「獻狀」全體から感じられるところであるが、特に、コメニウスが、人類の現狀を、およそ次のように語っていることからも察知されるであろう。すなわち、——コメニウスによれば——われわれは今、われわれ人間を天使にひとしからしめる悟性を棄て、天使にかんする事柄については、獸とひとしく、なんら知るところがない。永遠たるべく定められた人間が、當然このためにめぐらすべき・慎重な思慮を放棄し、永遠性のみか道徳性についても、忘きやくが支配し、その結果、多くの人々は、地上のもの、うつろい去り行くもの、いな、眼前にある死にさえも、身をゆだねている。これは、すなわち、すべての善なるものの高みをきわめるゆゑ一者について、これを知り、これをたたえ、これに接するためにわれわれに與えられた・敬けんな知のかわりに、われわれがその中に『生き、動き、かつ、在る』ところの神の前から身をしりぞけようとする・恐るべき傾向が生じていることを意味する。人々が互いに寄せ合う愛のかわりに、憎悪と、敵意と、戦争と、殺人とが支配し、正義のかわりに、不正と、悪事と、壓制と、盗みと、掠奪とが支配し、思念と言語と行動とにおける純潔のかわりに、不潔と、傲慢とが支配し、謙遜のかわりに、尊大と、不遜とが支配しているのである——。

一六一四年、二十二才の時、Preran にある・Bohemian Brotherhood 所屬の初等學校の教師の職についたコメニウスは、早くも一六一八年に三十年戦争の開始を迎え、一六二一年には、彼が牧師兼學校監督官としての職についていた Púnek の町——そこには、榮えた・この教團の教會があった——は、スペイン人の・慘虐な掠奪と兵火とに襲われ、彼もまた、財産、藏書、および、教育學上の論作の草稿を焼失した。先に「大教授學」の成立事情についてふれた・この教團にたいする・苛酷きわまりない迫害は、この世紀においては、實に右の時に始まったのである。このようにして、少くとも一六一八年から、「大教授學」成立の一六三二年までの十數年間、コメニウスは、直接間接に三十年戦争の戦禍にさらされていたのであり、してみると、右に彼が描いた情況は、この開始以來僅か數年の間に、ボヘミア四百萬の人口を七十、ないし、八十萬に減少せしめ、ボヘミアの定住農民人口を戦前の十五萬から五萬に、そして、コメニウスの故郷モラヴィアのそれを九萬から三萬に減少せしめ、國土を荒廢に歸せしめて、この國を「墓場の静寂」で蔽った、とつたえられる・⁶⁾かの戦亂を指すものであることは間違いない。このことは、前引の句に見られる通り、「かかる・血なまぐさい戦争と、かかる荒廢」とが、彼によってキリスト教的視點からする世界史の・いくつかの・大きな段落の一つと見なされているところにも、うかがわれるであろう。しかし、コメニウスは、體驗的にはなまなましいものであったに相違ない危機情況を、なおあくまで神學的にとらえたのであり、これが上の敘述に示されているのである。

ところで、右について私たちは、おそらく、次のように言うことができるのであろう。すなわち、コメニウスの神學的立場は、一方ではたしかに、彼の直接的體驗とその意味は極との間に、かなりの距離をおかしてはいるけれ

ども、しかし同時に、他方では、かかる立場を有していたればこそ、コメニウスは「人類的」視點から問題を提起した、ということである。もとより、彼を「人類的」視點に立たしめたものは、商業資本主義的段階に達した・當時のヨーロッパの諸關係であつたであらうし、いな、彼が體驗した三十年戦争それ自體の國際的規模が、彼をして、人類の運命に思いを潛ましめる機縁になつたのであらうけれども、少くともここで述べうることは、Herder によつて、「この監督は、彼の教團にたいしてのみならず、全人類にむかつて語っている」と言われえたのは、彼の・上のよるな立場による、ということである。私たちは、コメニウスの神學的立場が消極積極兩面の役割を果していることを、まず右のところに見るのである。

ところで、コメニウスにとり、人類の危機は、しかし、右に記されたところにつきたのであらうか。たしかに、かかる情況は、人類の救済に心からなる祈念を捧げた彼の魂を、悲嘆の感情で浸しはしたのであらうけれども、しかし、彼にとつて一層深刻な事態は、實に、人々が、あのような危機の中にありながら、なおこれを危機として感得しない、ということであり、これに戦りつしない、ということであり、これに驚がくしない、ということであり、これを悟つて痛恨の餘り息絶えることがない、という點に存した。すなわち、彼は、人類が、その救済にとつての・幾多の危機に臨みながら、しかもかかる危機を危機として意識せず、かかる墮落を墮落として感得しない、という情況の中に問題を見たのであり、ここで彼が、「自ら病にあることを知らぬ者には、自らをいやすことはできない。身の痛みを感じることをしない者は、溜息を發することもない。わが身の危険を悟らない者は、たとえ深淵の縁にあつても、身を引くことをしないのである」と述べた言葉は、彼の意識に映じた問題情況が、かかる・二重の、そしてそれゆえ、き

わめて深刻な危機であったことを、端的に物語るものであろう。

しかしながら、問題をこのように握し、ここに深い關心を寄せたコメニウスの中に、再び、ある種の心情が色濃く流れていたのであり、おそらく、「大教授學」の志向は、かかる心情を手掛りとすることなくしては、うかがいえない、と考えられる。すなわち、それは、ここでコメニウスが、『傳道の書』における・ソロモンの心事にことよせて、自らのそれを、次のように語っている、ということである。「まことに、ソロモンは、人間の犯す過誤の迷宮のすべてを吟味し、いたましくも、邪惡は正すをえず、缺陷は枚擧するをえないことを認め、ついに若き世代をたのむに至り、彼らにむかい、その・若き日々において、創造主をおもひ、かれをおそれ、かれのおしえをまもることを、願ったのである」。ここに語られている・ソロモンの心情が、そのまま、彼コメニウスのものであったことは、自ら、「……キリストは、われわれ成人にむかい、幼兒のごとくなることをすすめ、すなわち、われわれが、悪しき教育と世の惡例とから得た邪惡を振り棄て、單純と、穩和と、謙遜と、純潔と、および、從順との・われらの・以前の狀態にかえることをすすめた。しかしながら、われわれの習慣を棄てるにまさる難事はなく、したがって、悪しき教育を受けた人間が彼の・以前の狀態にかえることより困難な課題はないのである」と述べている言葉によっても確認されるところであろう。これを要するに、ここに流れている・コメニウスの心情は、なりよりもまず、墮落に沈み、人類的救済にむかつてはなされた《斷念》のそれであり、悲痛な・否定の意識であった、ということである。そして、このことは、彼が、右の連關の中で、「エテオピア人の膚（はだえ）をかえうるか、豹その斑駁（まだら）をかえうるか、もしこれをなしえば、惡に慣れたるなんじらも、善をなしうべし」と語る『エレミア記』の言葉を

J・A・コメニウス「大教授學」の志向

引用していることに照せば、もはや動かさえないものと言わなければならないのである。

このようにして、たしかに、コメニウスの中には、人類の救済にたいする「斷念」の心情が流れており、かかる pessimismこそ、彼の想念を特徴づけるものと言っても、おそらくさしつかえないであろう。しかしながら、私たちは、これと共に、きわめて明澄な人間觀照が彼の中に生きていることに目を注がなければならぬのである。彼は、前引のように、いくつかの・墮落の兆候をあげた後で、「しかし、右のすべてにもかかわらず、われわれには二重の慰めが残されている」として、第一に、神は、選ばれた人々のために永遠の樂園を設けており、われわれは、かつて失ったものよりも一層高い・一層堅固な完全性を見いだすであろう、と述べ、第二に、かつて、樂園からの失落、こう、水、イスラエルの子らの・カナンの地への入國、バビロンよりの復歸、イエルサレムの再建、キリストの昇天、および、コンスタンティン治政下における・福音の・全世界への普及等々の際に見られたように、神は常に砂漠を變じて悅樂の園と化したのであるが、現在の・流血の戦亂と荒廢との後にもまた、かかるものが期待されうる、と語るのである。

ところで、コメニウスの中にかかる optimism を支えていたものはなんであるかと言えば、それは、おそらく、次の節にうかがわれるような人間觀ではなかつたであろうか。「すなわち、樂園が、世界の・最も快い場所であつたのとひとしく、また人間は、被造物の・最も完全なるものであつた。……人間の中には、世界の全素材が、すなわち、あらゆる形相と、および、あらゆる種類の形相とが、神の巧みと賢知とを展示するために、いわば一つにあつめられていたのである。樂園は、善悪を知るの樹(き)を有し、人間は、善悪を識別する知性と、これを選別する意志とを

有していた。樂園には、生命の樹があった。人間の中には、不死そのものの樹、言いかえるならば、神の賢知があった。これは、その・永遠の樹根を人間の中におろしていたのである。右によって見るならば、あの慰めをコメニウスに與ええたものは、人間は、本来、神的な知と善と永遠性とを自らの中に有していた、という・極度に高められた・人間原型の觀照であった、と考えられるのである。

ところが、すでに見たように、人間には、もはや、かかる・本来の姿に復歸する道はとぎされている、と言う外はない。してみれば、コメニウスの中には、互に排除し合う・二つの想念の矛盾が存することになつたであろう。しかしながら、この矛盾は、おそらく次のような思考プロセスを経て、その解決に到達し、あるいは心理的に言うならば、その間の緊張の中にうつ積されたエネルギーの發出口を見いだしたに相違ないのである。すなわち、それは、——救済の望みが絶たれているのは、人類一般においてではなくて、實は成人の世代においてであり、これに反して、若い世代の中には、かかる危機からは自由な・そして、墮落の以前における人類の生命が、潜在的に、息づいている——ということであった。つまり、このように、コメニウスにとっては、人類は、成人の世代と若い世代とに分けられ、両者は、それぞれ、人類の墮落と人類の自然とを表わすものとして、したがってまた、救済の不可能性と、その可能性とを象徴するものとして現われ、そして、若い世代の中にある・人類の原型を發展せしめるもの、換言すれば、若い世代において人類の救済の可能性を現實性に轉化せしめるもの、それが教育である、とされることによって、彼の中にある・人類の救済への斷念と、しかし、それへの憧憬との矛盾が自らの解決の道を見いだした、と言いうるのであるまいか。彼は、前引の『エレミア記』の言葉に續いて、「ここから、必然的に、次のことが生ずる。すなわち、

J・A・コメニウス「大教授學」の志向

人類の墮落が是正さるべきであるとするならば、これは、若い世代の・慎重な教育を手段として行われなければならない」と述べているのであるが、その間を媒介するものは、右のような思考過程であったに相違ないのである。そして、この間の消息を知ることによって、私たちは、彼がソロモンの心事を前引のように語り、かつはまた、「聖書がわれわれに教える・最も有益な事柄は、沈^りんした人間性を高めるには、天日のもと、若い世代の・正しい教育よりも確かな方策はない、ということである」と述べている意味を理解しようのである。

以上によって私たちは、きわめて重要な・二つの事柄をうかがいえたものと考ええる。すなわち、その第一は、「大教授學」の志向が、果してどこに存したか、についてであり、第二は、それがいかなる意識構造に支えられていたか、についてである。言いかえるならば、この書は、それが、單に教育方法論の展示を目的したものではなく、三十年戦争という時代的情況の中に觀取された危機からの・人類の救済を教育の任務として語り、かつ、自らもかかるものを目指したことを示し、更にまた、教育が、人類の救済にたいする斷念と絶望と、しかしまた、それへの憧憬と確信という・相矛盾する・二つの想念と心情との緊張の中にもしだされた心的エネルギーの發出口であることを、告げているのである。なおまた、私たちは、かかる意識構造のすべてを蔽ってすぐれて神學的な觀照が漂っていたことを、指摘する必要がある。これは、一方ではたしかに、時代的情況の中に體驗された危機の直接性を緩和し、救済の内容と方法を制限せしめたには違いないけれども、しかしまた、それは他方では、コメニウスを人類性の立場に立たしめ、かつ、おらかな人間像を描きだすことによって、彼に人間救済の可能性を確信せしめる役割を果している、と言っているのである。

(1) この國のプロテスタントが、支配者ハプスブルク・フェルディナント二世の手から宗教的自由を奪取するために自らの國王として立てたフアルツ選帝侯フリードリッヒが、一六二〇年、Weißer Bergにおいて、フェルディナントと諸外國との同盟軍に粉碎され、いわゆる Winter-König の稱號をうけて以來、この國の上を襲った反動の波は、かの支配者をして、「プロテスタントイスマスの絶滅と、および、これと密接な連關にあるものとして、ホヘミアにおける、國會の特權の絶滅」とをその主要目標たらしめたのである (Georg Winter: Geschichte des Dreißigjährigen Krieges. Berlin. 1893. S. 230). 衆上の反動化と、政治上の専制主義化とは、相伴って進行したのであり (Ibid. S. 232). 財産没收と「權力の・あらゆる手段をもつてする・プロテスタントイスマスの弾壓」との結果、プロテスタントにとっては、國外亡命か、カトリックイスマスへの改宗以外に残された道はなかった、とつたえられている (Ibid. SS. 231, 233).

(2) ホヘミア語での草稿は、一八四一年、Lissa で發見され、Prague の博物館に送られた。ところが、出版検閲官は、コムニスが亡命者であった(一)という理由で、この公刊を禁止したのである。この印刷は、一八四九年に至って、博物館當局者の盡力で、許可された。

(3) Pansophic 教育にかんする志向は、もとより「大教授學」にもうかがわれるのであるが、しかし、これが彼の關心の中心になり始めたのは、コムニスが、Samuel Hartib のあっせんによつて、教育制度改革のためにイングランド議會の招きを受けて、ロンドンにおもむいた一六四一年頃と推定される。しかし、種々の事情がこの思考の發展を阻んだ。一六五〇年、彼は、ハンガリの貴族 Racocz 未亡人とその遺子との招きをうけ、Lissa より遠路 Saros-Patak におもむき、七年制學校の構想をたて、一六五四年までその計畫を實施したのであるが、この實踐と、かかる構想を描いた著作 Scholia Pansophica [Scholia Pansophica delineatio]. Saros-Patak 1651. とが、教育改革者としてのコムニスの名譽を一段と高からしめたのである。その後、彼の關心がもつばらこの構想に注がれていたことは、一六五六年、スウェーデンとポーランド間の戦亂によつて Lissa が島有に歸した際、Ruhes 時代と同よう、財産も蔵書も兵火に奪われ、「ほとんど着のみ着のまま、難をの

J. A. コムニス「大教授學」の志向

一橋論叢 第二十九卷 第六號

がれた」コメニウスが、なによりも、彼の「おびただし草稿」とりわけ、多年心血を注いでいた・Pansophia の勞作の喪失をいたみ、友人に、「子がこの勞作を失ったことについて嘆くのをやめる時があるとすれば、それは、子が息を引きとった時である」と書き送っていることによつても、知られるであらう。

(4) Winter, op. cit. 248.

(5) これらの人々のうち、こゝでは、Bodin と Andrea とについてふれておけばよいであらう。前述のように、コメニウスが、一六二七年、「教授學」の執筆に着手したのは、當時 Sadowsky の城にいた彼が、夏の一日、Wilitz の城に遊び、その蔵書の中で、近着の・Elia Bodin の「教授學」を見だし、同様の規模の論作を母國語で試みようとしたのが機縁である、とつたえられている。コメニウスは、また、「教授學」の執筆に當つて、これらの著作家たちに手紙で意見をこつたのであるが、返書を、しかも、彼を激勵する友情をもつて、寄せたのは、ただひとり、Andrea (1586—1654) のみであった。彼は、おそらく、當時にあつて、男女兒童の一般的學校教育義務を主張した第一人者であり、この點で特にコメニウスに深い影響を與えたものと推察される。

三十年戦争後、ドイツにおいては、成人の世代がおそるべき戦争の動亂の中に失つてしまつたものを、來るべき時代に再び興えようとする願いが、たとえば、一六四八年、國民學校の擴充を志す・畫期的なゴータ學校令となり、他の諸邦の教育制度にも大きな影響を與えたのであるが (Winter ibid. SS. 635—636)、コメニウスは、すでにこれよりもかなり早い時期に、同じ意識のもとに學校制度の基礎づけを試みた、と言ふであらう。

(6) Winter, ibid. S. 231.

(7) Herder: Briefe zur Beförderung der Humanität, Nr. 55.

(8) コメニウスにおける「國際主義と平和主義と教育との結合をきわめて高く評價」したところを J. S. Brubacher: A History of the Problems of Education, New York—London, McGraw-Hill, 1947, Internationalism and Educati-

on, in chap. III. がまき。彼は、I. L. Kandel: "John Amos Comenius, Citizen of the World"——School and Society, April, 1942. の問題提起にたがっているようであるが、第一次、第二次世界大戦を通じての・平和のための教育機構の變遷を論じた後、世界は三百年以前のコメニウスの明識を思いかえしてもよいのではないか、として、コメニウスの——おそらく、Pro pace Ecclesiae, 1643. の——次の言葉を引用している。「この世紀には、多くの人々をとらえ、彼らを狂氣の間に相互的破壊に驅り立てている狂亂を即刻取りしずめる方策が必要とされる。なぜなら、われわれの目にするところでは、全世界を通じて不和と戦争との・災と破壊とを招く炎が、もろもろの王國と國民とを荒廢に歸せしめ、しかもその力たるや、あたかも萬人が、ひとり彼ら自身と宇宙との破壊をもつてのみ終りを告げる相互的破壊を自ら共同に謀議したかのごとく思われる程であるからである。それゆえ、もし世界が全く壊滅をとげるべきではないとするならば、世界の安定にとつては、もろもろの精神がなんらか普遍的に再び献身し合うにまさる必要事はない。普遍的な調和と平和とが、全人類のために確保されなければならぬのである。だが、平和と言ひ調和と言ふも、それは、支配者と國民との間の・外面的な平和を意味するのではなく、ある體系の想念と感情とによつて感動せしめられた・もろもろの精神の内面的平和を意味するのである。もしかかるものが得られたならば、人類は豊かな未來を抱くことになるのである」。

三

前節で私たちは、「大教授學」の志向をめぐって、教育が、人間の救済にたいする否定と肯定との・緊張した矛盾の解決として現われていることを見、そして、かかる否定を産んだものが三十年戦争の悲惨であるとすれば、その肯定を支えているものは、ルネサンス的内容を持つ人間像であることを知った。ところで、前節の末尾でふれたように、かかる・高らかな人間像は、その形式において神學的であるのみでなく、また、かような形式によつて初めて支えら

Ｊ・Ａ・コメニウス「大教授學」の志向

れているのであり、このことは、「大教授學」本文第一章の「人間は、被造物の・最も高きもの、最も絶對的なるもの、そして、最もすぐれたるものである」という規定にもうかがわれるところである。すなわち、ここで人間がこのよ
うなものとして語られるのは、人間が、實踐的には、天と地とそこにある・一切の物との主であり、叡知的には、
存在と生命力と感覺と理性とを同時に與えられることによって、世界の縮圖であり、大宇宙を寫す小宇宙でありうる
ことを指すのであるが、しかしながら、これは、あくまで、人間が「永遠性と、賢知と、恩寵との源泉」なる神の被
造物であり、神の似姿であり、神の喜びであり、したがって、神の永遠性の伴侶であるからに外ならなかったのであ
る。

だが、神學的な調べが、常に、上に聞かれたように、人間への讃歌を一層誇りやかにし、一層解放的な感情をこれ
に付與するとは限らない。なぜなら、先に述べられた・人間の《自然》、すなわち、かつて墮落の以前に人間のもの
であったし、今また、教育が立ちむかうべきものとして人間の中に潜在する自然について、その構造を吟味する者に
とり、コメニウスのは、握の間にいちじるしい矛盾が見いだされるからである。

第一は、コメニウスの基本的見解が、あらゆる存在の目的論的は、握にあった、という點であろう。彼は言っている、
「神の知のしるしは、なにごとをも無益には行わぬ、ということ、換言すれば、一定の目的、ないしは、かかる目的
にふさわしい手段を伴わずには、なにごとをも行わぬ、ということである。だから、存在するものはいずれも、なん
らかの目的のために存在するのであり、また、「それは」、かかる目的を獲得するに必要な器官と設備とを與えられて
いるのである」(第五章)。そして、人間もまた、彼の前には、知と、徳と、および、神にたいする愛とを自らの存在

の目的とするものとして、現われたのである。

ここに言われる・三つのもの、すなわち、知と徳と敬けんとが、コメニウスにあつては、教育の目的とされているのであるが、これは一まずおき、右のような・中世的な・目的論的存在は、握が、果して、先に見られた・いわば人間主義的な観照と相いれるものであるかどうか、は疑わしいのではあるまいか。そしてまた、おそらく、かかるは、握の背後には、現世の生活の窮極目的を、ひたすら來世に觀じ、現世の生活を、單に來世の永遠性に至る準備と念じ（第三章）、かかる準備の・三つの段階として、自らと共にあらゆる物をも知ること、自らを支配すること、そして、自らを神にむけること、すなわち、知と徳と敬けんとを説く世界觀（第四章）が横わっていたものと考えられるのであつて、教育の目的に右の三者があげられている理由も、實はかかる連關から理解されうるのであるが、このような世界觀は、コメニウスが、一方では、かなりに地上否定的な心意に後退していることを物語るものであろうし、そして、それは、人間の神學的、握がコメニウスの上においた否定面、制約面を示すものと言わなければならないのである。

ところで、かような・思考上の不均衡は、第二に、コメニウスが、知と、徳と、敬けんとのそれぞれの能力の潜在性を立證しようとする際に（第五章）、ますます先鋭に露出する。

たしかに、知と、徳と、敬けんとが、先に言われたように、永遠性に至る道であり、また、それらが人間存在の目的であり、したがって、教育の目的をなすものとされるにせよ、なお、これらの根源が、なんらかの仕方、人間の中に先在するものでなければ、教育はついに不可能であろう。コメニウスは、三者の根源は人間自然の中に先在するも

のとして、「あたかも樹木が大地に固く根をおろすのに似て、これら三つの原理もまた、人間の中に固く根をおろしている」と述べ、これらを「潜在的な能力」と呼びあるいは、プラトンにしたがって、「種子」と名づけ、あるいはまた、アリストテレスにならって「空虚な形式」と稱したのである。だが、問題は、これら三つの原理がいかにして人間の中に先在するかについて論ずる際の、彼の思考にある。

まず、知について彼が語るのにしたがえば、知の器官、すなわち、精神と感官とは、ひたすら、activity をその生命としている。たとえば、人は、常に、なにか新しいものを見、聞き、あるいは、手にとり、一言で言うならば、絶えず新しい経験を求め、かつまた、その中に喜びを見いだす。この事實は、なにを物語るものであろうか。それは、諸種の感官や、あるいは、精神そのものが、自らの対象を、あたかも飢えた者がその食を求めるように、求め、これが、むさぼる姿に外ならないのであり、そして、感官と精神とは、かように対象を求め、したうことの内に、自らを越えて行くものである。そして、コメニウスは、平安と怠惰とをこの上もなく耐えがたいものとして感ずるこれらの active nature を、人間の叡知的自然の本質規定と考えたもののように、思われるのである。

しかしここで、私たちは特に、かかる・知の器官の activity が、知の發展に《無限性》を與えるものであった點を指摘しなければならない。

まず、コメニウスは、「人間は、まことに、神の業の中心に位するものであり、一室にかけられた球鏡に似て、周圍にある萬物の姿を寫す・明澄な精神を有する。しかり、周圍にある萬物を、である。なぜなら、われわれの精神は、ひとり、間近にある物をとらえるのみでなく、また、空間、あるいは、時間の中にはるかに隔たった物をも、とらえ

るからである。それは、もろもろの困難を克服し、隠れたものを驅りだし、隠されたものをあばき、測りがたいものをたずねて、うまない。その力は、かくも無限であり、かくも窮まりないものである」と語り、また、「精神の能力は、かくも限りないものであり、知覚の過程においては、それは、底知れぬ深淵に似ている。……精神には、天空の内においても、その外においても、限界が固定されることはありえない。それは、頭上の天空を越えて更に高みに上り、脚下の地中を貫ぬいて更に深みに潛む。精神にとって、天地は、現にある幾千倍の廣大さを有するのである」と、知の發展の無限性を述べている。人間が小宇宙 (Microcosm) であり、世界の縮圖 (Epitome) である、という世界観は、コメニウスにとってもまた正しいものであつたが、その意味は、右に語られているのとひとしく、人間の内部には、大宇宙を貫いて、遠くかつ廣くに展開する諸要素が藏されている、という點にあつたことは、明らかである。

このように、彼は人間の叡知にたいして壯麗なまでの讃歌を捧げるのであるが、しかし、このように、球鏡、ないしは、種子に比せられた精神——コメニウスは、これの同意語として理性という言葉をも用いる——は、一體いかにして萬物を寫し、あるいはまた、いかにして知の樹にまで展開しうるものであろうか。コメニウスは、ここに、感覺の役割を見た。すなわち、理性が、その外部に横わる萬物をとらえうるのは、「感覺器官の助けによる」のであり、「われわれの内に住む・理性的な魂にたいして感覺の器官が與えられている」のは、かかる意味に外ならない。感覺器官は、可感界にある・すべての事物の動靜を理性に伝える「使者」に比較されるのである。しかも、コメニウスにとつては、先述のように、この感官は、絶えず新しい對象を求めて休息を知らず、かつ、この感覺の眼を免かれうるもの

は、宇宙になに一つ存在しないのであるから、したがって、ここに、「感覺と理性とを與えられた人間にとらえられないものは、宇宙の中になに一つ存在せぬ」という確信が成立しうることになる。すなわち、コメニウスの場合、知の發展における無限性は、第一に、感覺作用の無限性に依據するものであった、と言いうるであらう。

しかしまた、第二に、それは、記憶能力の無限性に支えられるものでもあった。コメニウスは、記憶の座を脳髓と考へ、感覺と、その對象と、脳髓と、記憶との關係について、次のように述べている。「予の視覺、聽覺、嗅覺、味覺、ないしは、觸覺の器官に、ある印象を刻みつけるものは、いかなるものであれ、予にとっては、對象の像を予の脳髓の上に刻みつける刻印の關係に立つ」。もとより、注意作用が散漫であり、印象が薄弱であれば、すなわち、感覺的印象が稀薄であれば、記憶は、生じないか、生じても定かならぬものであるにすぎない。しかし、そうでなければ、あたかも木蠟がいかなる形をとることをも許すように、「脳髓は、萬物の像を受容し、かくすることによって、全宇宙に含まれているものを自らの中に取り入れる」のである。

たしかに、コメニウスの中には、一方で、人間の知的能力の無限性を、人間が「神の像(かたち)」であることに基礎づけようとする神學的思考が働いてはいるけれども、しかし、彼が、他方で、自然的な感覺⁽¹⁾、記憶機能に基いて、經驗主義的に右の問題に迫った點に、大きな評價が寄せられるべきである、と考えられるのである。

右に次いで、コメニウスは、徳の種子もまた、人間の自然の中に植えつけられていることを、示そうとする。第一には、人は誰しも、調和を愛する、という事柄によって。すなわち、美しい物體、美しい畫像、美しい音楽が、人の魂を魅了するのは、コメニウスによれば、それを構成する部分や、色彩や、音の比率が「調和」の中にあるからに外

ならない。この・同じ原理は、また、ある人の徳が、他の人々にとって、尊敬の源泉である、ということをも生ぜしめる。なぜなら、人が、他人の徳を尊敬するとは、人が、他人の中にある・性格と行爲との「調和」を愛する、ということ物を語る以外のものではないからである。このようにして、コメニウスにとっては、調和を愛しこれを楽しむ・人間の自然的傾向は、徳の種子が、人間の中に存在することをあかしするものでもあったのである。

コメニウスが指摘する・第二の事情は、「まことに、人間は、その肉體にかんしても、その精神にかんしても、一つの調和以外のなものでもない」、ということである。宇宙があたかも一つの巨大な時計仕掛に似ているのとひとしく、人間の肉體は、運動の主因たる錘りに相當する脳髓と、紐に當る神経と、諸多の齒車に當る四肢との間に、運動の比率における「均衡」が保たれることによって、機能しているのである。この原理は、また、魂の運動をも支配している、と言いうるのであろう。すなわち、魂においては、錘りは、欲望と情念とであり、これが、最も重要な齒車に當る意志を回轉せしめるのである。しかしながら、この兩者の間において、欲望と情念との錘りを餘りに重からしめぬように作用するもの、たとえば、齒止めの役割を果すものが存在する。それは、すなわち、理性であり、なにを、どこに、そして、どこまで、求め、ないしは、避けるべきか、を定めるのは、これである。言いかえるならば、理性は、コメニウスにとつて、魂の運動の中に調和、すなわち、徳を齎らすものとして現われたのである。

以上二つの敘述に照すならば、人間の叡知的能力についての・コメニウスの議論は、驚くばかりに近代であり、断定的に經驗主義的であり、そして、すこぶる開放的である。これに比すれば、道徳的能力についての議論の中では、もとより部分的には新しい見解が示されてはいるものの、その内容は、前者のそれほど豊富ではない。ところが、敬

けんの根源、すなわち、宗教的能力の先在性について論ずる段になると、コメニウスの議論は、再び全く神學的であり、その内容は、一層はなはだしく貧弱なことを露呈する。すなわち、この點にかんする・彼の論證は、僅かに次のものにすぎないのである。つまり、コメニウスによれば、「人間の中に敬けんの根源が現在することは、彼が神の像（かたち）である事實によって、示されている」。なぜなら、像とは、類似性を含むものであるからである。それゆえ、人間は、彼が自らの存在の姿を明らかに理解する限り、必然的に、自らの起源である神にむかうものであり、他の欲望がこれを妨げることはありえない、と言わなければならないのである。

以上によって見るならば、コメニウスにおいて、知と、徳と、敬けんととの先在性を論ずる際の思考が、互にいちじろしく背離し、その内容がすこぶる不均衡である、と言っても、それが必ずしも言い過ぎでない理由がなっ得されるであろう。そして、後に見られるように、知識^{II}すなわち科學教育と、道徳教育と、および、宗教教育との・それぞれの教育方法論の間に（特に、第二十章、第二十三章、第二十四章）、ほとんど破たんに近い不統一が存在するのは、右の矛盾に連關するものと考えられるのである。

もとより、ここでふれた以外に、かかる矛盾を指摘し、その・それぞれの構造と、その間の關係とを明らかにすべきものは、コメニウスの心情と思想と思考との中に、幾多残されている。かかる分析と共に、そのような諸矛盾が、時代の精神的情況のいかなるものに原因を有するか、をたずね、かつまた、「大教授學」の・かかる内的構成を通じて時代の精神的位相を確認する、いう手續きの中に、この書の歴史的な性格が現われて來るのである。ここでは、そ

の一二——しかし、もとより重要な——ものについて考察の手掛りを示したにとどまる。

- (1) かかる経験主義は、科教育方法論においては明確な Sense-realism となる。「大教授學」第二十章、「特に諸科學の方法について」の中では、知の對象は、リアルな物でなければならぬことを説いた後、「ここから、教師のための金文字が得られよう。すなわち、あらゆる物は、あたる限り、諸感覺の前におかれるべきである」と述べられる(第六節)。この原則は、遺稿 Spielzeug didacticum の中にも、「人は、あたる限り、すべての物を、諸感覺でとらえなければならぬ。すべては、atrop-
fa を通じて」と表現されている(第十六節ノ一)。

かかる原則の根據については、前書にあつては、第一に、知の始まりは、常に、諸感覺から來るのであり、悟性は、まず諸感覺から得られたものでなければ、なにもものも持たぬからであり(第七節)、第二に、科學の眞理と確實性とは、他のなにもにもまして、諸感覺の證言にこそ依存するからであり(第八節)、第三に、まことに Quintilian の言うように、知の獲得は記憶に依據するものであるが、感覺は、この記憶の最も忠實なしもべであるから(第九節)、と述べられている。後書にあつては、感覺は、悟性と信仰と(この二者は、感覺と共に、知の三つの器官をなす)にとつて、手段の役割を果す——なぜなら、感覺の中にはないものは、悟性の中にも信仰の中にもないから——のであり、また、悟性が、過ぎ去つた事物の跡や影をのみ示し、信仰が、事物についで、他人の證言のみをつたえるのにたいして、感覺は、直下に事物に参じ、これをとらえるのであり、したがつて、感覺は、「人間認識の最初の・そして、最も確實な器官」である、とされるのである(第一一節)。「大教授學」第二十章と Spielzeug didacticum とは、同じ問題を取り扱つており、兩者の比較研究は、成立年代の不明な後書の執筆期を明らかにし、コメニウスの思考の發展段階を知るために、必要な事柄であらう。